

タイから見た日本文学

プリーチャーパンヤー・シャヤーポーン

はじめに

2014年の11月、タイにおける「J Series Festival」というイベントが行われた。「J Series Festival」は海外における「日本ブーム」を巻き起こすために、日本のコンテンツをPRするイベントである。このイベントは海外で大規模に実施され、現地の人々に日本を広く知ってもらえるように、日本のドラマ作品のダイジェスト上映やドラマ出演者によるトークショーや音楽パフォーマンスイベントなどが行われている⁽¹⁾。

タイでは、タイの放送番組が日本のドラマを改めてタイ人の間に流行させようとして、日本のドラマについてのイベントが催され、アイドルのタッキー（滝沢秀明）や川口春菜の俳優が招かれた。このイベントはタイのジャニーズのファンを感激させたが、それ以上に、日本文化を好むタイ人が、これからの日本との交流において、改めて日本の文化と日本ドラマがブームになることを強く期待するものであった。

振り返って見れば、このようなイベントは初めてではない。1980年代に日本のポップ・カルチャーが流行し、日本文化や日本語に興味を持つ人が増えた。その結果、現在、タイ王国の多数の高校と大学では日本語専攻コースが開かれている。そして、漫画・アニメやアイドルグループへの関心をきっかけに、日本語を学びはじめたタイ人が増えてきている。その上に、タイの東部に、日本の企業が多く工場を建てており、日本語の能力を持っている人なら仕事を心得、高い給料ももらえる可能性が増えている。

ところが、韓国文化の流行や、タイの政治混乱によって、日本に関するイベントがしばらく行われていなかった。アイドルのコンサートも中止された。しかし、2013年から、日本に15日間滞在するタイ人にはビザが不要になったことが

(1) 「J Series Festival (アジア諸国における日本ドラマのプロモーション展開)」, 2009, International Drama Festival in TOKYO, <http://j-ba.or.jp/drafes/jseries/jseries.html> (参照2015-1-10)

きっかけとなって、日本を訪れるタイ人が大幅に増加した。タイ人にとっては、日本はまだタイ人の好む国なのである。

日・タイの関係は、2007年に日・タイの関係修好120周年記念を迎えている⁽²⁾。日本とタイは、1887年に正式に修好関係を結んだが、実は日本とタイは600年前から交流していたことがわかっている。ポップ・カルチャー、別の言い方をすれば、「クールジャパン」以上に、タイ人は「日本」を認識しており、また日本文化はタイ人に大きな影響を与えている。タイ人であり、しかも日本文学を研究している筆者は、タイ人が認識する「日本」とはどのようなものかについて、興味を覚えた。そこで、タイにおける日本文学がどのように受け入れられているのか、また、タイ人は「日本」という国をどのようにイメージしているのかを検討してみたい。その一方で、日本人はタイにどのような印象を持っているのかについても明らかにする。

本稿はタイ語に翻訳された日本文学がタイ人に与えた影響と、日本文学におけるタイの象徴とタイ文学における日本の象徴について考察するものである。

1. タイと日本の交流歴史

日・タイの文学について述べる前に、タイと日本との交流の歴史に簡単に触れておきたい。日本が東南アジアの国と最初に外交関係を結んだのはタイである。タイと日本の交流は正式には128年前に始まるが、実は初めてのタイと日本の交流は、史料によれば、沖縄の那覇の貿易港で、タイのアユタヤー、インドネシアのシャワー島とスマトラ島との間で貿易船が派遣されていた時点にまで遡る。『高麗史』には1388年に、タイ国王の命を奉じたと称する暹羅船の乗組員8名が、一年間日本に滞在したのち、高麗王にタイの物産を献上しようとした、という記事がある。このことは史料『歴史宝案』にも見える⁽³⁾。

アユタヤー朝時代には、アユタヤーの首都にも日本町が形成され、江戸時代の徳川幕府とアユタヤー朝が献上品や書簡を交換していたが、幕府の鎖国政策により交流が中止された。明治時代になり、タイはアユタヤー朝からチャックリー朝に代わり、首都はバンコクになって、日本と同じように近代国家建設を開始する状態になった。1887年(明治22)の貿易をきっかけに、タイと日本は正式な交国を始めたのである。

2007年には日・タイ修好の120周年記念を迎えて、一年中、文化・芸術などの

(2) 注“ความสัมพันธ์ระหว่างประเทศไทยและญี่ปุ่น”, 2557,

สถานเอกอัครราชทูตประจำประเทศไทย,

<http://www.th.emb-japan.go.jp/th/relation/index.html> (参照2015-1-10)

(3) 石井米雄・吉川利治(2009)『日・タイ交流六〇〇年史』PP: 4-5

イベントが行われた。今まで、タイと日本は経済的に深い関係にあり、タイの投資額の半分は日本によるもので、バンコク日本人商工会議所加盟企業は1270社以上にも上る。その上、タイに滞在する日本人は約4万人であり、観光として訪れる日本人は120万人以上である。

タイにおける日本語教育は国際交流基金・バンコクセンターの2004年調査によると、タイ全国で日本語を教える学校や大学は385校である。今ではこの数を上回っているであろう。タイにおける日本語や日本文化に興味を持つ人々の数は将来も増え続け、今まで以上に詳しく日本についての知識を持つ人も多くなることであろう。

2. タイ語訳の日本文学

2. 1 タイにおける日本の近代文学（純文学）

それでは、タイにおいて日本文学はどのように受け入れられているのであろうか。日本文学として初めて知られたのは、近代文学、その中でもいわゆる純文学である。

日本近代文学、なかでも純文学が、最初のタイ語に翻訳されたジャンルである。その翻訳のあり方は、英語訳からの翻訳と、日本語の原作からの翻訳の2つがある。1957年、初めてタイ語に訳された日本文学は、徳富蘆花の『不如帰』である。翻訳者のアマラーワディー氏は直接日本語から翻訳せずに、英語訳「NAMIKO」から翻訳した。この作品は外国では人気を博したが、タイでは大きな反響を呼ばなかった⁽⁴⁾。内容が暗く重いなので、タイ人の性格に合わなかったと考えられる。

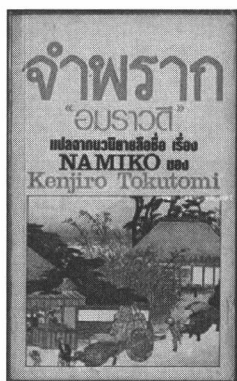


図1 『不如帰』のタイ語版

⁽⁴⁾ 宇戸清治2015「タイにおける日本文学翻訳の過去と現在」
東京外国語大学『日本研究教育年報19』2015.3



図2 夏目漱石の『坊っちゃん』タイ語版(2008)

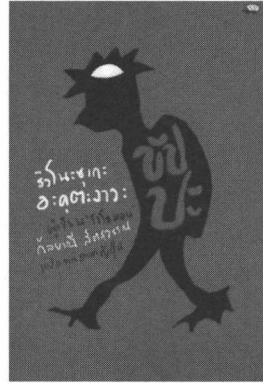


図3 芥川龍之介の『河童』タイ語版(2011(第3版))

その後は、日本文学の代表的作家の作品、たとえば、夏目漱石、芥川龍之介、川端康成、三島由紀夫などの作品も次々と翻訳された。しかし、これらの作品は英語訳からの翻訳で、日本語の原作からの翻訳ではなかった。それは、当時においては日本語や日本文化を十分に理解している人がわずかであったからであろう。

日本語の原作から翻訳された作品として、芥川龍之介の『河童』(1978)と夏目漱石の『こころ』が2000年に登場した。これらは大学の出版社からではなく、民間経営の出版社から出版された。しかし両作品は、日本に強い興味をもっているタイ人ではないと、受け止めにくいものであると思われる。内容も暗く、曖昧な表現で理解しにくい。タイ文学のスタイルははっきり描き、内容は暗くても、理解はしやすいので、この点で、一般読者馴染みにくかったと言える。

2. 1. 1 タイにおける『羅生門』と日本の『羅生門』

タイ人の中で話題になった作品は、タイの首相ククリットが、黒沢明の映画の英語版を翻訳した『羅生門』である。この作品はタイ人の日本文学の認識に大きな影響を与えているように思われる。

黒沢の『羅生門』とオリジナルの芥川龍之介の『羅生門』は全く異なる。今までタイ人の中で人気を博している『羅生門』は、黒沢明のものであり、この『羅生門』は国王のラーマ9世の前で劇として演じられてもいる⁽⁵⁾。多くのタイ人は『羅生門』といえば、芥川龍之介の名を浮かべるが、それは日本人の『羅生門』

⁽⁵⁾ อากุตาภาวะ ริโนะซึกะ 2011 ราโซมอน ผู้แปลคฤฤทธิ ปราโมช สำนักพิมพ์ดอกหญ้า กรุงเทพฯ

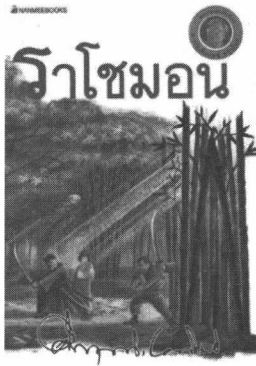


図4 『羅生門』タイ語版（左）

図5 タイの映画『羅生門』（右）

とは異なっているのである。

2011年には、黒沢明の『羅生門』に基づく映画『ウモンパームーン』が制作された。内容はオリジナルと同じだが、仏教的思想やタイの北部の雰囲気が加えられている。オリジナルとは作品名が違っているが、タイ人に「芥川龍之介」と『羅生門』の名を知らしめるものとなった。タイ人にとっての日本文学とは、まず芥川龍之介の『藪の中』に基づいた黒沢明の『羅生門』であったといえよう。

2. 2 児童文学

タイ語に翻訳された日本文学として次に重要なジャンルは児童文学である。最もタイ人に有名な作品は、1984年に出版された黒柳徹子の『窓際のトットちゃん』である。ブッサディー・ナーワーウィット氏の翻訳はとても魅力的で、一般読者にも感情移入しやすいため、大ヒットし、タイ文部省が小学校の副読本に採用したほどである。その後には、さまざまな児童文学作品や絵本なども翻訳された。筆者の多くの友達は『窓際のトットちゃん』を小学生の頃から読み、「可愛い作品」と言っている。

筆者の経験によれば、タイに受け入れられた児童文学は『窓際のトットちゃん』にとどまらず、日本童話の絵本『鶴の恩返し』も挙げることができる。日本童話の絵本の画像は可愛く、子どもに好まれるようだ。

2. 3 現代文学と大衆文学

このように日本の児童文学はタイ人対して大きい影響を与えているが、平松秀樹氏によると、1999年に、チュラーロンコーン大学のガンラヤニー准教授がタイ



図6 『窓際のトットちゃん』 タイ語版

における日本文学の受容について、次のように述べている。

タイにおけるタイ語訳の日本文学作品の今後の動向を見ると、あまり明る
いとは言えません。最近タイ語の日本文学はあまり見かけません。本屋へ
行っても楽しいものがなく古いものもあまり売れないので出版も中止され
ている状況です。

ところが2000年以降には転回があり、ナムティップ・メーターセート准教授
(チュラーロンコーン大学) が鈴木光司の『リング』を翻訳しはじめてから、
日本文学がタイ語に多数翻訳されるようになった⁽⁶⁾。たとえば、吉本バナナの
『キッチン』をはじめ、江国香織の作品やサスペンス小説、『金田一耕助ファイル』の
シリーズ小説などが翻訳された。こうした展開は、タイ人の日本文学の認識を変化させ、
純文学や大衆文学と現代文学へと関心を移させた。しかも、当時日本の
ポップ・カルチャーもタイに流行していたので、大衆文学と現代文学が受け入れ
やすくなっていたのではないとも考えられる。ナムティップ (2007)⁽⁷⁾ は次の
ように語っている。

最近のタイの若い世代にはファンタジー系の作品が好まれているようで
あり、日本文学は日本現代作家の描く現実とも幻想ともつかない日常の中で
出現した摩訶不思議な空間・出来事は西洋文学の叙事的な壮大なファンタ

⁽⁶⁾ 平松秀樹「タイにおける日本文学・文化及びポップカルチャー受容の現状と研究—『ミ
カド』『蝶々夫人』からプライス・人形まで—」[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/
k-rsc/lcs/kiyou/pdf_21-3/RitsIILCS_21.3pp17-28HIRAMATSU.pdf](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_21-3/RitsIILCS_21.3pp17-28HIRAMATSU.pdf)

⁽⁷⁾ 佐伯順子、ナムティップ・メーターセート (2007)「日本文学を通してみた日タイ交
流の現在」『Japan Letter』第56号 (参照2015-1-2)

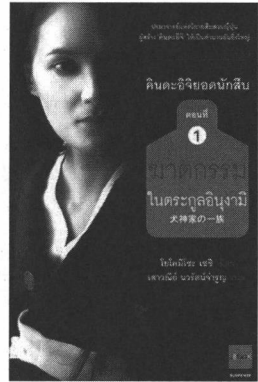
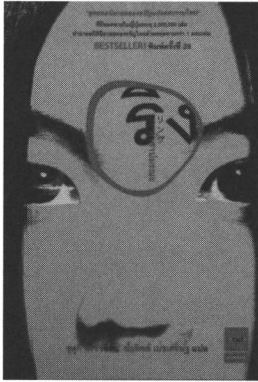


図7 『リング』タイ語版(左)
図8 『キッチン』タイ語版(中)
図9 『金田一耕助ファイル』タイ語版(右)

ジーと異なっている面白さがあり、また、これは女性作家だけでなく、村上春樹などにも共通することを、文が短く、感覚的な文章を使い独特のリズムを使って表現するところなど、日本文学独特の語り口や切り口が新鮮であり、都会的でおしゃれな雰囲気がタイ人の若者の憧れや共感を得ているのだと思われる。「日本文学はポップでキュート」とも評されている。背景となる歴史や伝統が異なっても、その受け入れやすにより普及している。(pp.2)

しかし、人気があったにもかかわらず、出版が急に中止され、その後、吉本バナナや江国香織の作品の翻訳も見られなくなった。ナムティップ(2007)は、日本文学でよく読まれているばは、ホラーやミステリーのジャンルが多いが、日本の恋愛小説の場合は、タイ人にとって理解できないところがあるせいか、あまり受け入れられていない(pp.3)。理由は社会倫理や恋愛観の違いが大きく、とくに、80年代以降の日本のドライな恋愛観や中高年男性と若い女性の恋愛また近親相姦的な要素の含まれている作品、たとえば川上弘美の『先生の鞆』、林真理子の『不機嫌な果実』などは、出版社の選書の階段でボツになることが多い。川端康成の古典的作品ならともかく、『失楽園』のように不倫やエロティズムが全面に押し出された作品を大衆文学として大々的に売るとは、検閲などの問題があって出版は難しいのが現状だと述べている(pp.4)。



図10 日本語からタイ語に翻訳された村上春樹の『1Q84』



図11 『螢・納屋を焼く・その他の短編』

2. 3. 1 村上春樹とタイ人

2012年に大きな日本文学の翻訳の出版社は中止されたが(2013年から現在までは改めて出版されている)、村上春樹の作品は10年経っても、タイの読者に人気がある。宇戸清治(2015)は「大学生が村上春樹の翻訳小説をまるでファッションの一部のように持ち歩いている光景はいまでは珍しくもない。」⁽⁸⁾(pp.191)と言う。初期には、村上春樹の作品は英語訳から翻訳された。それ以来、村上春樹の作品はタイの読者や現代文学の作家たちに愛され、翻訳されつづけた。その後、日本語の原作からも翻訳され、タイの有名な作家も村上春樹の作品を紹介している。しかし、英語訳によるのでは間違える可能性があるため、現在では村上が好むような日本語を読み込める翻訳者と、日本を専門とする研究者による、日本語の原作のタイ語訳が増えている。『1Q84』や短編小説も、チュラーロンコーン大学マッターナー・チャトゥラセンパイロート氏と翻訳者が共同で翻訳している。

興味深いことに、村上春樹がタイの若者の間で大ヒットし、タイのアーティスト系の人々の間でも村上春樹の作品は読まなければならないものとされているようである。しかし、実際に村上春樹の作品をどれだけ理解できているのかわからない。ただ、格好よく見せるために、村上春樹の作品を持ち歩いているだけだ、という批判的な発言もある。

タイの現代作家のパープダーユンのエッセー(2007)には、タイにおける村上春樹の作品の翻訳点に関して、村上春樹の作品を読んだことがあるタイ人たちが、実際に村上春樹のことを理解していないと述べる。村上春樹の作品の愛好者であるパープダーユンより年下の後輩の場合、英語訳から翻訳された『ノルウェイの森』

⁽⁸⁾ 宇戸清治(2015)「タイにおける日本文学翻訳の過去と現在」東京外国語大学『日本研究教育年報19』2015.3

は好きだが、実は作品の内容的が好きなのか、翻訳のスタイルが好きなのかを区別しにくくなっている。後輩に、なぜ村上春樹の作品が好きかと尋ねると、「村上春樹は女性が分かるから」と答えた。パープダーユンには、文化背景が異なり、英語と日本語から翻訳された作品を読むタイ人と、直接にオリジナル原文から読む日本人は同じように読まれているのか疑問に感じたと言っていた。筆者の周囲のにも村上春樹の作品に憧れる人、あるいは好まない人もいるが、やはり翻訳された作品を読む人と、日本語オリジナルを読む人とが読み取れたものは異なっていると思われる。興味深いことに一人の知り合いは、日本語はわかるが、日本語のオリジナル原文を読むよりもんだことがなく、村上春樹の翻訳された作品の方を好んでいる。筆者はこの点について今は検討不足であるが、今後、日本語原文を読み解く力が充分を得られたら、翻訳されたものと同じように読み取れるのか検証してみたいと思う。

2. 4 日本の古典文学

一方、日本の古典文学の翻訳については、チューラーロンコーン大学のアッタヤー・スワランダー准教授が活躍している。ほとんどは大学の出版社を利用しており、利益を考慮せずに出版することができている。日本の神話に始まり江戸時代の文学まで、たとえば、『古事記』や『百人一首』をタイ語に翻訳し、現在は『方丈記』を翻訳している、また『方丈記』についてのエッセイも書いている。また、チューラーロンコーン大学シリモンポーン・スリヤウォンパイサンーン准教授は謡曲を専門とし、世阿弥の『風姿花伝』をタイ語に翻訳した。大学の研究者たちが、大学の出版社を利用することで、翻訳される作品も今後増えるのではないかと思われる。古典の原文から翻訳したテキストや本は現在のところわずかなので、日本語専門の学生たちの研究には貴重な資料となっている。

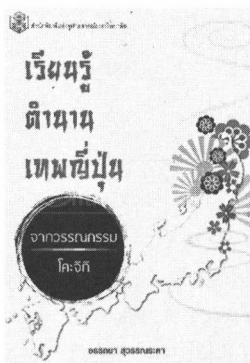


図12 タイ語版『古事記』(左)



図13 タイ語版『竹取物語』(右)

3. 日本文学における「タイ」

日・タイの交流歴史や、タイにおける日本文学についても触れたが、それでは、日本文学においてタイはどのように描かれているのであろうか。

改めて調査をしてみると、タイを舞台とする日本の小説がはなはだ少ないことがわかった。メータセート・ナムティップ (2010) は、「日本的なオリエンタリズムのまなざし」がタイに対して表象されているかを視点して、タイに対する日本小説を考察している。

明治以降、日本人には、西洋伝来の文明史観に自己同一化することによって、アジア的なものを「貧乏」「停滞」「野生」「怠慢」などという固定した概念で捉えることになる。⁽⁹⁾

このような概念化の一方で、戦後、三島由紀夫の『暁の寺』(1970) に描いたタイのイメージはエキゾチックで官能的なオリエンタルの夢の南国であり、定番の観光名所、例えば、オリエンタルホテル、パッポン通り、ストリップバー、水上マーケット、キックボクシング、アユタヤ遺跡、パタヤビーチなどが、官能を誘う空間として登場する。

さらに、メータセート・ナムティップ (2007)⁽¹⁰⁾ は日本小説におけるロマンスという点からタイ表象に関して以下5作品 (宮本輝『愉楽の園』、嵐山光三郎『蘭の皮膜』、山田詠美『天国の右手』、佐藤亜有子『ボディ・レンタル』、辻仁成の『サヨナライツカ』、を考察にしている。これらの作品は1980年台後半以降に描かれ、それは日本が国際社会で勝ち抜くために再びアジアに目を向けるようになった期間であり、アジア旅行もブームになった時代である (pp.137-138)。したがって、取り上げる作品では、日本人の主人公はタイに旅行し、日本では出来ない恋愛経験を体験し、自分自身のアイデンティティを再確認していく過程が描かれている。タイのイメージは日本人のロマンスや空想を盛り上げるため現実の姿とは似ても似つかない、よりエキゾチックで官能的なオリエンタルとして創造された (pp.143)。

⁽⁹⁾ メータセート・ナムティップ (2010) 「日本文学にみるタイ表象—オリエンタリズムのまなざしから観光のまなざしへ—」『立命館言語文化研究21巻3号』

⁽¹⁰⁾ メータセート・ナムティップ (2007) 「日本文学に描かれたタイ」『チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科主催2007年度タイ国日本研究シンポジウム』

一方、橋本順光⁽¹¹⁾ (2014) によれば、江戸時代の山田長政の恋愛物語を描く作品は、欧化主義によって流入してきた植民地主義や異人種間ロマンスの間接的な影響による (pp.164) という。

ここで、筆者の友人の卒業論文を取り上げたい。ティントーン・タンナター (2011) は中村敦夫の『チェンマイの首』についてタイを舞台として物語を語られる主流の作品ではないが、南進論という観点から分析すれば、日本人のタイの国についてのイメージが見える。すなわち、東南アジアの国のタイはアメリカから支配され、人々も教育が低く、日本より進歩していない国という意識で象徴されているのだと指摘している。

これらの研究から、日本的なオリエンタリズム概念と南進論で、日本人はタイに対して、弱い、教育が低い、貧乏などのイメージが創造されたということがわかる。しかし、殺人事件の舞台に設定されたのは、タイが日本人にとって謎めいたイメージの国であったからではないかとも思われる。この問題については、今後さらに多くの小説を詳しく分析しなければならないと考えている。なお、残念なことに、これらの小説は、タイ語に翻訳されておらず、タイ人の、この日本文学におけるタイのイメージについての研究はまだ行われていない。

4. タイ文学における「日本」

タイ文学において、「日本」という国のイメージや「日本」が象徴するものが、どのように創り出されているかについて見てみたい。

第二次世界大戦から戦後にかけて、タイ人は日本人や日本文化に触れるようになった。最も人気があるタイの女流作家トムヤンティが書いた、日本に関するタイ小説『クー・カム (メナムの残照)』である。第二次世界大戦中にタイに赴任



図14 タイ語版『クー・カム (メナムの残照)』(左)

図15 2014年の映画『クー・カム (メナムの残照)』(右)

(11) 橋本順光 (2014) 「ボカホントス伝説としての山田長政物語—明治の小説から大映の映画まで」『タイ国日本研究国際シンポジウム2014論文報告書』



図16 『山田長政・アユタヤー侍』映画 (左)



図17 『山田長政・アユタヤー侍』映画の山田長政がタイの子どもたちと遊んでいるシーン (右)

した若い日本兵「小堀」と、「自由タイ」という団体と疑いがかけられているタイ政府高官の娘「アンスマリン (太陽という意味)」の悲しい恋愛の話である。この小説は映画化され、今日でもドラマや演劇が繰り返し上演されている。この小説によって、タイ人に対する日本のよいイメージがタイ人の間に植え付けられたようである。「小堀」は日本兵なのに、愛しい女性のため、国の関係など気にせず、命を救う。「日本の男性は優しい」というイメージが与えられている。

また、アユタヤー朝の時代に最も有名な日本人の「山田長政」に関する映画も製作されている。日本武士の「誠」が描かれ、日本人であるのにもかわらず、アユタヤー王の命を救う。この映画によれば、タイ人に対して、日本人、特に男性は武士道精神を持ちながら、内面は優しいというイメージがあるようだ。

2014年話題になった人気のラブドラマ「The rising sun」は、日本やくぎの親分とタイ女性の留学生とのラブストーリーである。しかし、間違っている情報が多く、不自然な日本語が使われたり、着物の帯の結び方も通常でない形をしていたりするなど、作家の知識不足のまま書いたものであることが、日本語のわかるタイ人の間で話題になった。作家は日本語や日本文化についての知識もっている留学生や日本人の友達とも相談したと発言しているが、原文をみると、タイ語の普通の会話中に突然日本語が出てきたり、名前を呼ぶ代りに、夫は妻のことを日本語のまま「君」と呼び、妻は夫のことは「あなた」と呼んだりしているシーンが多い。たとえば、「ね、僕の君。」「私はずっとあなたのあなたになる」などの奇妙な日本語もあった。女性は着物を着ているのに、髪を縛っていないかったり、正式な着物を着たまま料理を作ったり、日本人からすると結構不自然に思われる点が多々ある。



図18 髪型が現代的すぎた日本女性



図19 正式な着物を着たままた料理を作っている主人公

その上、『The rising sun』の小説の表紙は、日本刀の画像も載せているが、タイ人にとっての「日本人」のイメージは、いまだに武士道が表現する、「桜」「刀」「侍」などなのであろう。(表紙の画像図20)

また、2015年には、ファンタジーストリー、鶴の神と悪霊の戦いの話であるタイ小説『コン着物』をドラマ化した作品も放送された。男性の主人公は日本人、女性主人公はタイからの留学生という設定で、タイのスーパースター、トンチャイ・マックインタイも何年ぶりかで出演している。このドラマがきっかけで、日本のロケ地を訪ねるタイ人観光客も多くなったと報告されている。

したがって、タイ文学の中の「日本」は、『クー・ガム』と『山田長政』の男性主人公の「武士道」や「侍」という印象であり、ポップ・カルチャーの影響を

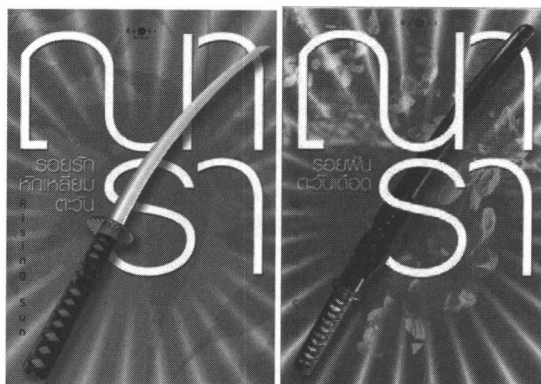


図20 「The rising sun」の作品表紙

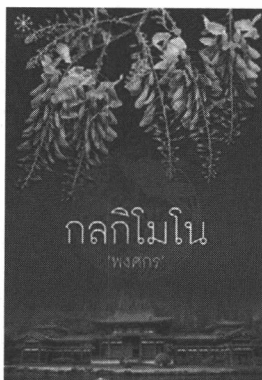


図21 「コン着物」の作品表紙

受けた『The rising sun』と『コン着物』では「やくざ」や「侍」や「妖怪」という印象に取ると言える。日本文化にかかわるタイ語訳の情報が多いにもかかわらず、こうした文化的現代を見る限り、実際のところタイ人は日本のことをまだ正しく理解していないように筆者には思われる。

こうしたことは、タイの恋愛小説には「日本」のイメージはタイの若者にとって日本は都会的な景色や雰囲気など憧れの場所であり、同じように自分の国、あるいはタイではできない経験も経験できる場所だと考えられているように思われる。しかし、タイの主人公は自分自身のアイデンティティをそこで再確認することはできない。タイ小説の場合には、まだ恋愛が物語の中心として描かれていると思われる。

ただし、興味深いところは多くの日本小説のタイに旅行する主人公は「男性」だが、タイ小説の日本に訪ねる主人公は「女性」と設定されている場合が多く見られ、主人公の性別も両者の文化的特色と関連性があるのではないかと考えられる。こうした点についても詳しく分析してみたいと考えている。

5. タイの日本文学研究

チュラーロンコーン大学の文学部では、学部生の場合は自由研究の授業があり、文学と文化や社会について研究している学生もいる。大学院の場合は、まず文学の時代を決めて作品を選ぶ。今まで研究されてきたものとして、古典文学では『古事記』『源氏物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』『枕草子』『義経記』など。また、謡曲の研究もある。近代文学では夏目漱石、志賀直哉、川端康成、大江健三郎などの代表作家の作品が研究されてきた。現代文学では、吉本ばなな、村上春樹、江国香織などの作品も研究されてきている。ただし、純文学に関する研究でないと思われなかった。

また、最近先生たちは純文学ばかりではなく、大衆文学も研究すれば面白くなるのではないかという議論も出てきている。したがって、大学院生は純文学のみならず、今後は大衆文学も研究することができるのではないかという可能性に期待している。

一方、チュラーロンコーン大学の比較文学学科では、純文学に限らず、すでに大衆文学を中心に研究する学生が多い。日本語の原文から読める人が少なく英語訳を読む人が多いが、日本語がわかる人に限らず、日本文学はタイ人の中で人気があると言える。

6. 終わりに

タイと日本は長い関係を持ち、日本の文化、特に若者文化はタイ人の中で流行しており、日本文化に興味を持ち、日本語を学ぶ人が増えるにつれ、日本語教育も充実し、日本に留学してから研究者になる人も多くなってきた。日本文化に触れる窓である文学について言えば、純文学より大衆文学やライトノベルの方を読む人が多い。しかし、純文学をはずして大衆文学にだけでは、日本の社会や日本人の思想を深く理解することはできない。

しかし、商業的に見た場合、タイでは、日本の純文学だけでは多くの利益を得られないので、出版社が出版を中止する場合が多い。その点だけからすると、タイにおける日本文学の将来は必ずしも明るいとは言えないが、これから日本学の若手研究者も増え、ネットワークを作り上げ、タイ人に多くの日本文学を紹介できれば、ポップ・カルチャーのみならず、日本の文化と思想も伝わり、タイと日本の相互理解を深めることができるのではないかと筆者は考えられる。

ポップ・カルチャーや観光PRは人々に大きな影響を与えるので、日本についての間違った認識を植え付ける原因にもなっている。本稿では、筆者はタイ文学における「日本」の印象について検討し、また、タイを描写している日本文学にも言及したが、タイ文学の「日本」も、日本文学の「タイ」も、実際のところ、現実の日本やタイと大きく異なっていた。タイと日本の間に長い交流の歴史があるのに、真実のお互いの姿を理解できていないように思われた。しかし、これからタイにおける日本文学についての研究、日本におけるタイ文学の研究が積み重ねられてゆく中で、着実相互の理解が深まることを期待したい。本稿がその一助となれば幸いである。

参考文献

- 石井米雄・吉川利治 (2009) 『日・タイ交流六〇〇年史』 講談社
- 宇戸清治 (2015) 「タイにおける日本文学翻訳の過去と現在」
東京外国語大学『日本研究教育年報19』 2015.3
- 柿崎一郎 (2007) 『物語 タイの歴史』 中公新書
- 橋本順光 (2014) 「ボカホントス伝説としての山田長政物語—明治の小説から大映の映画まで」『タイ国日本研究国際シンポジウム2014論文報告書』
- 平松秀樹 「タイにおける日本文学・文化及びポップカルチャー受容の現状と研究—『ミカド』『蝶々夫人』からブライス・人形まで—」, http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_21-3/RitsIILCS_21.3pp17-28HIRAMATSU.pdf (参照2015-1-2)
- 佐伯順子、ナムティップ・メーターセート (2007) 「日本文学を通してみた日タイ交流の現在」『Japan Letter』 第56号 (参照2015-1-2)
- メータセート・ナムティップ (2007) 「日本文学に描かれたタイ『チューラーロンコン』
大学文学部東洋言語学科主催2007年度タイ国日本研究シンポジウム」
- メータセート・ナムティップ (2010) 「日本文学にみるタイ表象—オリエンタリズムのまなざしから観光のまなざしへ—」『立命館言語文化研究21巻3号』
- テントーン・タンナター (2011) 「中村敦夫の『チェンマイの首』から見たタイのイメージ」
チェンマイ大学人文学部日本語学科の卒業論文
- 「J Series Festival (アジア諸国における日本ドラマのプロモーション展開)」, 2009,
International Drama Festival in TOKYO, <http://j-ba.or.jp/drafes/jsseries/jsseries.html> (参照2015-1-10)
- ปราบดาทฤษฎ์ 2007 เขียนถึงญี่ปุ่น สำนักพิมพ์ไต้ฝุ่น : กรุงเทพฯ
- อากุตาทวะ ธิวโนะสุเกะ 2011 ราโชมอน ผู้แปลศีกฤทธิ ปราโมช สำนักพิมพ์ดอกหญ้า :
กรุงเทพฯ “ความสัมพันธ์ระหว่างประเทศญี่ปุ่นและประเทศไทย”, 2557,
สถานเอกอัครราชทูตประจำประเทศไทย,
<http://www.th.emb-japan.go.jp/th/relation/index.html> (参照2015-1-10)
- (ぶりーちゃんぱんやー・しゃやぼーん／チューラーロンコン大学大学院修士課程
文学部東洋言語学科日本語講座)